

# 『破戒』

登場人物

牛神  
 牛藤村 3  
 牛藤村 2  
 牛藤村 1  
 お志保？  
 お志保  
 敬之進  
 銀之助  
 瀬川丑松 3  
 瀬川丑松 2  
 瀬川丑松 1

「破戒」出番表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
丑松 1		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
丑松 2		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
丑松 3		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
牛藤村 1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
牛藤村 2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
牛藤村 3		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
銀之助		○	○			○		○			○	○		
敬之進		○			○		○							
お志保								○				○	○	
お志保？	○			○		○			○		○			○
牛神	○	○	○		○			○	○		○		○	○

【0】

牛神 総ては今この瞬間に起きている。

この瞬間こそが、過去や未来も変える可能性を秘めている。

お志保？ はじめまして。私は小説「破戒」に登場する。お志保と言う者です。

皆さん、ご存じかと思いますが「破戒」の作者は、島崎藤村です。

随分と前に書かれた小説ですので、古く感じる所もあるかと思えます。

古さも文学的な味わいとして、受け止めていただけたら幸いです。

島崎藤村は、小諸に住んでいたことがありました。小諸での生活が「破戒」の

世界観を作ったと思います。浅間山の雄大な自然と、そこに暮らす人々の営みに、

島崎藤村は、豊かな時間の流れを感じたのだと思います。

【1】

牛神 島崎藤村「破戒」。これより開演いたします。

牛藤村 1 これは過去の物語である。過去には後の時代にとって、反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。天長節の夜。宿直の当番であったので、

教員の瀬川丑松と土屋銀之助は小学校に残った。

牛藤村 2 風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

牛藤村 1 宿直室の時計は九時を打った。丑松は見廻りに行き、二十分ほどで帰って来た。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 おい、どうした？

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 顔色が悪いですよ。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 実は、不思議なことがあるんだ。

丑松 2 校舎を廻って運動場に行くと、誰か呼ぶ声がある。それは、僕の親父の声なんだ。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 妙なことが有るものだな。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 どんな風に呼びました？

牛藤村 3 丑松う。

丑松 3 丑松、丑松とつづけざまに。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 名前を？

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 確かに呼んだんです。親父の声だった。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 お父さんは西乃入の牧場だろう。あんな遠くから、まさか。

牛藤村 3 丑松うう。

丑松 2 また声が！もう一度行ってきます。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 どうも気掛かりだ。我々も行こうか。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 そうですね。

牛藤村 2 丑松は、声のする方を辿って行った。

牛藤村 3 丑松、丑松。

丑松 3 おとっさん、おとっさん。

丑松 1 また声が聞える。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 おい、大丈夫か？何も聞こえなかったぞ。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 吾輩にも聞こえない。きっと幻聴だよ。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 まあ、気にするな。ちょっと疲れているんだよ。

牛藤村 2 翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。

父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。

牛藤村 1 丑松、隠せ。いかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決って打明けるな。

牛藤村 2 一時の感情や気の迷いで、この戒を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。

牛藤村 1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

牛藤村 3 丑松。

丑松（全員） おとっさん、おとっさん。

【2】

牛藤村 1 蓮華寺では下宿を兼ねた。丑松が急に引っ越しを思い立ち、借りる事にした部屋は、蔵裏の続きにある二階の角のところ。

牛藤村 2 その窓から、飯山の町並みや小学校も見える。夕方近くに丑松は町へ出かけた。

丑松 1 本町の雑誌屋には、新着の書物を筆太に書いて張出してあった。

丑松 2 かねて新聞広告で見て、出版の日を楽しみにしていた「懺悔録」

牛藤村 1 猪子蓮太郎、著。定価も書添えた広告が目につく。

丑松 3 胸が踊るような心地がした。

丑松 1 黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。四十銭を出して買い求めた。

丑松 2 本を抱いて下宿に帰って行く途中、学校の同僚に会った。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 瀬川君、大層遅いじゃないか。

牛藤村 2 銀之助は、丑松から下宿を替えた話を聞いた。

銀之助 君はよく下宿を替える人だねえ。こないだ引越したばかりじゃないか。

牛藤村 1 その時、丑松の持っている本が目についた。

銀之助 「懺悔録」か。相変わらず君は猪子先生のものが好きだな。まあ君は愛読を

通り越して崇拝だ。さぞかしました、この本の事を聞かせられるだろうなあ。

牛藤村 2 夕餐の煙は町の空をこめて、同僚の姿も黄昏がれて見えた。

牛藤村 3 丑松。

丑松 3 僕は、いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、

うろろうして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。

丑松 1 僕は、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、

はっきりしない。淋しい顔をしている人が、偉そうに見えて仕方が無い。

丑松 2 可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

丑松 3 僕は、人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。

実感としては、何もわからない。

丑松 1 人を憎むとは、どういう気持ちか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、

何もわからない。僕が実感として、わかる情緒は、可哀想という思いだけだ。

丑松 2 この感情だけで、生きて来たんだ。

丑松 3 僕は、可哀想に思われて仕方がないんだ。

丑松（全員）可哀想に思われて仕方がないんだ。

牛神 過去と未来に縛られる者は、今を感じる事が出来なくなる。

【3】

牛藤村 1 丑松は下宿の畳の上に倒れて、身動きもせずに考えていた。

牛藤村 2 『懺悔録』は、我は穢多なり、という文句で始めてあった。

牛藤村 1 我は穢多なり。同じ人間でありながら、軽蔑される道理は無い。

牛藤村 2 過去の記憶が丑松の胸の中に生き返った。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 七つ八つの頃まで、よく他の子どもに調戯われたり、

丑松 2 石を投げられたりした。その恐れの情がふたたび起って来た。

丑松 3 朦朧ながら、小諸の向町にいた頃のことを思い出した。

丑松 1 『懺悔録』を読んで、せつない苦しみを感じた。

牛藤村 1・2 丑松もまた。穢多なのである。

お志保？ 「破戒」は「穢多」という身分の差別を主題として書かれた小説です。

穢多とは、士農工商という身分の下に位置づけられていました。

日本では古来より「血」が穢らわしい物とされておりましてので、

生き物を屠殺し皮を剥ぐ職業も忌み嫌われていたのです。

これらの職業を生業とする人々が穢多と呼ばれ、その身分は代々引き継がれていったのです。

【4】

牛藤村 1 丑松。

丑松 1 校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。

牛藤村 3 いえ。別に。

丑松 2 実は風間さんが、お願いがあるそうです。

牛藤村 3 私に？何ですか。

牛藤村 1 敬之進。

敬之進 あの、ですね。少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですね。

牛藤村 1 丑松。

丑松 3 そんなに遠慮しないで。

丑松 1 私から伺います。風間さんのように退職となった場合には、恩給を受けさせて

頂く訳に参りませんものでしょうか。

牛藤村 3 無論です、そんなことは。小学校令の規則を出して御覧なさい。

丑松 2 そりゃあ規則は規則ですけれど。

牛藤村 3 恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上、在職したものに限った話です。

彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。

丑松 3 でも、わずか半年のことで。

牛藤村 3 それを許したら際限が無い。恩給のことは諦めて養生なさい。

丑松 1 どうです、貴方からも御願いしてみても、

牛藤村 1 敬之進。

敬之進 いえ、今の御話を伺えば。お言葉に従って、諦めるより外はないと思います。

牛神 軽蔑。嫉妬。憎悪。そして、差別。人間が奥底に抱える闇の冷たさを感じる。

牛、牛、牛。我は、牛神なり。

【5】

牛藤村 2 もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校にいる頃から、

気の合った友達だった。

牛藤村 1 あの頃に比べると丑松は変わった。以前の快活さを失った。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 どうにも気掛かりで、蓮華寺に尋ねて行った。苔蒸した石の階段を上り、

落葉を掃いていた寺男に、瀬川君はおりますか。と聞く、

寺男は葎裏の方へ見に行った。急に声がした。

丑松 1 まあ、あがりたまえ。

銀之助 見ると瀬川君が二階の障子を開けて、顔を出した。私は暗い梯子段をあがった。

牛藤村 2 机の上には『懺悔録』

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 よく君は引越して歩くね。部屋は、前の下宿の方がよさそうじゃないか。

丑松 2 ここの、鼠が多いのには驚いた。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 鼠？

丑松 3 昨夜は枕元にも来たよ。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。

丑松 1 猫を飼って鼠を捕らせるより、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。

丑松 2 食物さえ宛行つてやれば、そんなに悪さする動物ぢゃない。

丑松 3 うちの鼠は温順しいから御覧なさいって。そう言われて見ると、

少しも人を恐れない。白昼ですら出て遊んでいる。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 奥様という人は変った人だね。

丑松 1 普通の人より宗教的などころがあるのさ。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 他にはどんな人がいるんだ？

丑松 2 子坊主が一人。下女。それに庄太という寺男。

丑松 3 それから、風間さんの娘で、このお寺に貰われて来ている、お志保さん。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 風間さんの娘が。

丑松 1 そう。お志保さんは、僕たちの来る前の年に学校を卒業した人だよ。

お志保？ 明治元年。天皇陛下がご誓文を出されて、我が国は近代国家の仲間入りを果たしました。

士農工商の身分制度の廃止。明治四年には解放令によって穢多、非人という身分の区別も廃止されました。我が国は天皇陛下のもと、総ての国民が平等なのです。

と、私は学校で教わりました。でも、本当に平等なんでしょうか？

【6】

牛藤村 1 一膳めし、笹屋。表の障子を開けて入ると、のみくいしている二、三の客。

主婦さんは流許に行ったり、竈の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 主婦さん、何かありますか。

牛藤村 2 川魚の煮いたのに、豆腐の汁ならごわす。

丑松 2 そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 よう、めずらしい御客様が来てますね。

牛藤村 3 丑松。

丑松 3 風間さん、釣りですか。ちったあ釣れましたかね。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 獲物なしさ。朝から寒い思をして、一匹も釣れない。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 とりあえず、一つ差上げましょう。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 君から盃を貰おうとは。道理で今日は釣れない訳だ。

牛藤村 1 身を震わせながら、さも甘そうに地酒を飲む。

敬之進 我輩も学校を辞めてから、これという用が無いもんだから、釣りなぞを始めた。

牛藤村 3 丑松。

丑松 2 この雪の中で釣れるんですか。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 素人はこれだから困る。冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。

なに、風さえなけりや、そう思った程でもないよ。しかし、なにが辛いと言ったって、用がなくて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。実は、こないだ、娘に逢いました。

丑松 3 お志保さんに。

牛藤村 3 敬之進。

敬之進 娘の方から逢ってくれろという。もつとも、我輩もね、成るべく娘には逢わないようにしている。ところが何か相談したいことがあると言うもんだから、

久し振に逢ってみた。もうどうしても蓮華寺にはいられない、一日も早く家へ帰るようになしてくれ、頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、我輩も始めてあの住職の性質を知ったような訳さ。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 性質と言うと？

牛藤村 3 敬之進。

敬之進　よく世間には立派な人物だと言われているが、女というものにかけて、非常に

弱い男があるものだね。蓮華寺の住職もやはりそうだろうと思うよ。娘はもう

悲いやら恐しいやらで、夜も寝られないと言う。一日も早く引取りたいが、また

娘が飛込んで来て見給え。八人の親子がどうして食べよう。娘に帰れとは言われ

ない。先方が親らしい行為をしないまでも、これまで育てて貰った恩義も有る。

一旦、蓮華寺の娘と成った以上は、どんな辛いことがあろうと決して家へ帰るな。

そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、無理やり娘を追立てたよ。

牛藤村 3　丑松。

丑松 2　知りませんでした、お志保さんがそんな辛い思いをしていたなんて。

牛藤村 3　敬之進。

敬之進　吾輩は情けない父親だよ。

【7】

牛藤村 2 この大雪を衝いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、

という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。

牛藤村 1 その日は宿直の当番として、丑松と銀之助は学校に居残ることに成った。

牛藤村 2 もっとも銀之助は用事が有ると出て行って、日暮になっても帰って来なかった。

牛藤村 1 蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、

牛藤村 2 ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくお志保の身も案じられる。

牛藤村 1 さまざまな想像に耽りながら、悄然とランプの火を見つめて居るうちに

牛藤村 1・2 お志保が入って来た。

丑松 3 お志保さん。

丑松 1 どうしてこんなところに。

牛藤村 3 お志保。

お志保 何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の一つも懸けてくれないの。何故、口唇は言いたいことも言わないで、堅く閉じ、塞がって恐れと苦しみとで震えているの。今の私を見て。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 見給え、君があまり沈んでいるから、だから君は誤解されるんだ。

丑松 2 誤解されるとは？

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 君を穢多だなんて、実に途方もないことを言う人もいる。

丑松 3 誰がそんな事を？

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 僕は青年時代の悲しみということを考えて、いつも君の為に泣きたくなる。

実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。

君から切出してくれると、およばずながら出来るだけのことは尽すよ。

牛藤村 1・2 隠せ。隠せ。絶対に隠せ。

これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。

丑松（全員） おとっさん、おとっさん。

牛藤村 3 丑松は自らの叫び声で、夢から目を覚ましたのである。

牛神 迷いと葛藤の中に、別れと苦しみの懐古園。

黄金の寅が、独り侘しく草笛を聴く。

嗚呼、桜の花よ。

【8】

牛藤村 1 月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。

牛藤村 2 応接室の側の一間を自分の部屋と定め、毎朝授業の始まる前には、

牛藤村 1 そこに閉籠るのが癖。

牛藤村 2 それは事務の支度をする為でもあったが、また一つには職員達の不平と、

煙草の臭気を避ける為でもあった。

牛藤村 1 戸を叩くものが有る。

牛藤村 2 その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。

牛藤村 1 校長はこうして、お気に入りの教員から報告を聞くのである。

牛藤村 2 いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。校長。

牛藤村 3 勝野君。君は、妙なことを言ったね。どうも君の話は要領をえず、解りにくい。

牛藤村 1 勝野文平。

牛藤村 3 一生の名誉に関わることを、迂濶にはしゃべれないじゃ有ませんか。まあ、事実だとしたら

瀬川君は学校にいらなくなるでしょう。

牛藤村 2 校長。

牛藤村 3 誰から彼のことを聞いたのかね。

牛藤村 1 勝野文平。

牛藤村 3 妙な人から聞きました。まあ代議士にでも成ろうという位の人物ですから、

無責任なことを言う筈も有ません。

牛藤村 2 校長。

牛藤村 3 代議士にでも？高柳利三郎か。益々、気になる。はっきり言いたまえ。

牛藤村 1 勝野文平。

牛藤村 3 わかりました。ちょっとお耳を拝借。ヒソヒソヒソ。

牛藤村 2 校長。

牛藤村 3 まさか！瀬川君が穢多だとは、夢にも思わなかった。

お志保？ 明治三十二年。島崎藤村は小諸義塾の英語教師として小諸に赴任し、六年間暮らしました。

結婚して、子も授かります。この頃からそれまでの詩作から散文へと転回していきます。

そして、小諸や千曲川一帯を描写した「千曲川のスケッチ」を書きました。

島崎藤村が「破戒」を書き始めたのもこの頃からです。

藤村は小諸で何を感じて「破戒」を書き始めたのでしょうか？

牛神 町の田が戸惑いつつ現れた朝。藤の澤は酒に、呑まるる。

我。迷いの中に、揺蕩う。知らぬ間に蔵へ入らん。

【9】

丑松 1 とある店の横手に、貼付けてある広告が目についた。

丑松 2 見ると政見を発表する会で、猪子先生の名前も一緒に書き並べてあった。

丑松 3 会場は法福寺、その日の午後六時から開会するとある。

丑松 1 日暮れを待って、人知れず猪子先生に逢いに行こう。

牛藤村 2 こう考えて、蓮華寺に戻り部屋に居ると、奥様が入って来た。

牛藤村 1 こんなことになりやしないか、と思って私も心配していたんです。

牛藤村 2 と前置をして、奥様は昨宵の出来事を話した。

丑松 2 日暮れ頃、お志保さんは郵便を出すと言って出たつきり、帰って来ないとのこと。

丑松 3 箆笥の上に置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので。

丑松 1 その中には、自分一人の為に様々な迷惑を掛けるようでは、義理ある両親に申訳が無い。などと書いてあった。

牛藤村 1 奥様。心配で眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。父親さんの方へ帰って居るらしい。和尚さんだって眼が覚めましたろうよ、今度という今度は。

牛藤村 2 奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。

丑松 2 釣りと昼寝と酒より外には働く気のない父親。

丑松 3 あの家へ帰ったとしても、果してこれから、お志保さんはどうなるだろう。

丑松 1 言うに言われぬ悲しい心地になった。

牛藤村 1 急に丑松は壁を離れた。廊下を通り抜け、蓮華寺の門を出た。

丑松 2 猪子先生の事を考えながら、千曲川の畔へ出た。先生に自分のことを話そう。

丑松 3 煙る夜の空気を浴び、やって来る人影を認めた。演説会が終わったところだ。

丑松 1 皆、激昂したり、憤慨したりして、聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。

丑松 2 猪子先生の演説は深い感動を町の人々に伝えたらしい。

牛藤村 2 宿に行つて逢おう。こう考えて歩いた。表に立つて覗いて見ると、取込んだことでも有るのか人々が入り出して居る。亭主であろう男を呼留めて、

蓮太郎のことを尋ねた。すると亭主の口から意外な報知を聞いた。

丑松 3 法福寺の門前で猪子先生が襲われた。

牛藤村 1 丑松は亭主の後について法福寺へと急いだ。

牛藤村 2 丑松が駈付けた時は、間に合わなかった。聞いて見ると、蓮太郎は石か何かで烈しく殴られた。何の抵抗も出来なかったらしい。血が雪の上を流れていた。

牛藤村 1 思わず蓮太郎の耳へ口を寄せた。

牛藤村 2 蓮太郎の蒼ざめた頬へ自分の頬を押し宛てて、呼んで見ても、

牛藤村 1 月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。

丑松 1 先生、先生。

牛藤村 2 そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。

牛藤村 1 戸板に載せ、上から外套を懸けて、宿に向けて出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。

丑松 2 さくさくと音のする雪を踏んで、猪子先生の一生を考えながらついて行った。

丑松 3 我は穢多を恥とせず。その言葉が心に浮かんだ。

牛藤村 2 自分は隠蔽そうとして、その為に一時も自分を忘れることが出来なかった。

自分で自分を欺いて居た。何を思い、何を煩う。

丑松 (全員) 我は穢多なり。

丑松 1 明日、学校へ行って打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。

牛藤村 1 丑松は新しい暁の近づいたことを知った。

牛藤村 3

学校へ行く支度をする為、丑松は朝早く蓮華寺へ戻った。朝飯の後、机に向って進退伺を書いた。冬の朝日が射す障子を開けて、雪に包まれた町々を眺める。

家と家との間からは小学校の建物も、朝日をうけた。しばらく眺め入って居たが、胸に浮んだのは『懺悔録』第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更のように新しく感じて、告白するように繰返した。我は穢多なり。我は穢多なり。

蓮華寺の山門を出て、とある町の角で、向こうから巡査に引かれて来る男に出逢った。

黒の紋付羽織、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、

高柳利三郎と知れた。町の人々は猪子蓮太郎を襲った犯人だと囁き合っている。

学校の運動場には雪が積上げてあった。

丑松 2

玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。

丑松 3

授業が始まるまで、あちこちと廻って歩くと、大鈴の音が響き渡った。

丑松 1 湧上る胸の想いを制えながら、三時間目の習字を教えた。

丑松 2 午後の課目は地理と国語だった。

丑松 3 五時間目には、国語の教科書の他に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持って教室へ入った。

丑松 1 教科書に取掛り、やがていつもの半分ばかり講釈したところで本を閉じた。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 1 皆さんに少し話す事があります。

丑松 2 と言って生徒たちを眺め渡す。

丑松 3 私は皆さんに、別れを告げなければなりません。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 1 皆さんも御存じでしょう。

丑松 2 この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。

丑松 3 それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶、それからまだ外に

丑松 1 穢多という階級があります。

丑松 2 もしその穢多がこの教室にやって来て、皆さんに国語や地理を教えるとしまし  
たら、皆さんはどう思いますか、皆さんの父親さんや母親さんは、  
どう思いませんか。実は、私はその卑賤しい穢多の一人です。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 3 どうぞ私の言うこと、よく覚えて置いて下さい。これから五年十年と経って、  
皆さんが小学校時代のことを考える時に。あの教室で、先生に習ったことが  
有ったつけ。

牛藤村 1・2 丑松。

丑松 1 あの穢多の教員が素性を告白けて、別れを述べた事を思い出して頂きたいのです。  
私は卑賤しい生れでも、皆さんが立派な考えを御持ちなさるように、

それを心掛けて教えた積りです。

牛藤村 3 丑松。

丑松 2 皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、どうぞ父親さんや母親さんに私のことを話して下さい。今まで隠蔽して居たのは全くすまなかつた、い まった と言つて、皆さんに告白けたと話して下さい。

丑松 (全員) 私は穢多です。

丑松 3 不浄な人間です。

丑松 1 許して下さい。

牛藤村 2 教室に居る生徒は総立ちに成つた。その時、大鈴の音が響き渡つた。教室の戸が開いた。他の組の生徒も教師も出て来た。

牛藤村 1 銀之助は職員室で、丑松のことを耳に入れ職員室を飛出した。

銀之助 玄関を横切つて、左右に馳違ふ生徒の群を分けて、高等四年の教室に行つてみると、

廊下のところに校長、教師五六人、中に文平も、その他高等科の生徒が

瀬川君をとりまいて居た。君、大丈夫か？と話しかけると、

瀬川君は懐から進退伺いを取り出して、こう言った。

丑松（全員） 許してくれ給え。私は穢多です。

銀之助 君の決意はわかった。ここは任せて、帰りたまえ。

牛藤村 丑松は、銀之助に促され学校を出て行ったのである。

お志保？ 明治三十八年の四月。島崎藤村は、仕上げのすんでいない「破戒」の草稿を携え、

幼い娘達や妻と共に、東京へ引っ越しました。上京間もない五月に、三女がハシカから

急性脳膜炎をわずらい亡くなります。「破戒」が完成し、自費出版されたのは

明治三十九年三月でした。直後の四月に次女が急性腸カタルで、六月には長女が三女と

同じ経緯で亡くなります。「破戒」完成の前後、藤村は相次いで娘達を失います。

父親としての藤村は、どんな想いを抱えていたのでしょうか？

牛神 浅間から吹き抜ける風に、黄金の稲穂が騒めく。

明かり染める谷に、武者が一瞬を捉える。

鈴の木は、ここに祈りを捧げ、総てを潤す石の井戸が、

黒き岩を噴き上げる力の源なり。

牛、牛、牛。我は、牛神なり。

【11】

銀之助 瀬川君はきつと、お志保さんの所に行くはずだ。

牛藤村 1 銀之助は敬之進の住居を訪れた。

牛藤村 2 友達思いの彼は心配しながら、丑松を追って来たのであった。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたか。

牛藤村 3 お志保。

お志保 さつき御帰りに成ました。

銀之助 さつき？

お志保 瀬川さんは御気の毒な様子でした。私は穢多です、許してくださいと言って、出て行ってしまわれました。

銀之助 あなたも驚いたでしょう。

お志保 いいえ、前に文平さんから聞きましたから。

銀之助 勝野君から？

お志保 瀬川さんのことを、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、気の毒でなりません。

銀之助 ほんとに？僕は、瀬川君を貴方に助けて頂きたいと思っていますのです。

お志保 私に？

銀之助 ええ。瀬川君は貴方のことを大切に思っています。自分の素性を考え及ばない希望と。

それで貴方に、今まで隠していた素性を告白けたのです。瀬川君の真情が解りましたら、

助けてやろうという考えを、持って下さることは出来ずまいか。

お志保　もう私は、その積もりです。

銀之助　まだ近くにいる筈だ、一緒に探しましょう。

【12】

牛藤村 1　丑松は、

牛藤村 2　雪の中を

牛藤村 1　千曲川に向かって、

牛藤村 2　歩いていった。

牛藤村 3　丑松。

丑松 1　おとっさん。

丑松 2　私は戒めを、

丑松 3　破りました。

牛藤村 1 隠せ。いかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決つて打明けるな、

牛藤村 2 一時の感情や気の迷いで、この戒を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。

牛藤村 3 丑松。

丑松 1 私は、世の中から捨てられる。

丑松 2 生きるのが、怖い。

丑松 3 世の中が、怖い。

丑松 1 人間が、怖い。

丑松 2 流れる血が、怖い。

牛藤村 3 丑松。

丑松 3 私は殺されるのですか？

丑松 1 なぜ、殺されるのです？

丑松 2 人間ではないからですか？

丑松 3 人間とは、何ですか？

丑松 1 死ぬと、どうなるのです？

牛藤村 3 丑松。

丑松 2 おとっさん、答えて下さい。

丑松 3 おとっさん、寒い。

丑松 1 独りは、寒いです。

丑松 2 死んでも独りですか？

丑松 3 私は、ここで

丑松（全員）死ぬのですね。

牛神 命は、この瞬間に生きている。

牛藤村 1・2 この瞬間の命こそが、

牛神 無限の可能性を秘めている。

牛藤村 3 銀之助。

銀之助 瀬川君！

牛藤村 3 お志保。

お志保 無事でよかった。

銀之助 助けに来たよ。

丑松 1 助けに？

お志保 貴方は、もう独りじゃありません。

丑松 2 独りじゃない？

お志保 そうですよ。

銀之助 僕たちは、仲間じゃないか。

丑松 3 ありがとう。

牛神 運命の流れに運ばれる命。

時間と言う支流が出会い、重なり合って、

やがて時代という大きな流れを形成していく。

命は、川の流れの様に出会いを重ねる事で、深みを増していく。

頼もしきかな命。牛、牛、牛。我は、牛神なり。

命を見つめる者なり。

【13】

牛藤村 1      これは過去の物語である。

牛藤村 2      過去には後の時代に取り、反省すべき事柄も多い。

牛藤村 1      過去こそ、真実であるからであろう。

牛藤村 2      真実とは何か、考え続ける事が、新たな未来を開くだろう。

牛藤村 3      そして瀬川丑松は、仲間達の助けを借り、新たな広い世界へ、踏み出していったのである。

お志保？      瀬川さんや銀之助さんとの出会いが、私の生き方を変えました。

今、この瞬間を大切に、私は生きています。

牛神 島崎藤村「破戒」。本日は、これにて終演といたします。